

令和4年度 公立鳥取環境大学
学校推薦型選抜（Ⅱ型）問題

小 論 文
(環境学部 90分)

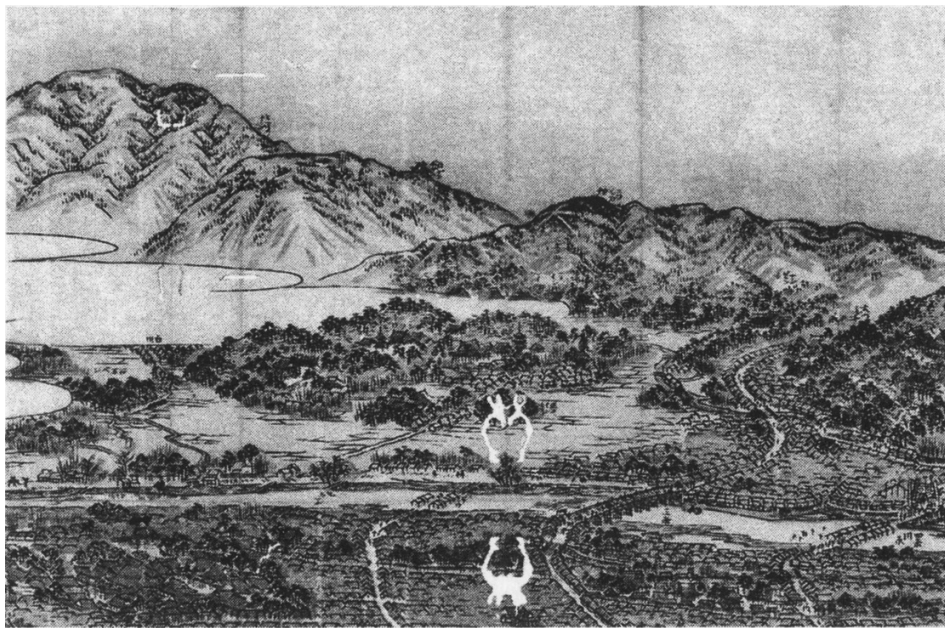
(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は3ページ、解答用紙は1枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

以下の文章は、宮内泰介『歩く、見る、聞く 人びとの自然再生』（2017年）の一部を抜粋・改変したものである。これを読んで後の問いに答えなさい。

過去の自然がどういう状態だったのかを探るのは、思いのほかむずかしい。

京都精華大学の小椋純一さんは、それを昔の絵図から分析するというユニークな研究を続けている。たとえば下図は1808年に刊行された「花洛一覽図」からのものである。



「花洛一覽図」とは、当時の京都各所を描いた絵図であるが、図をよく見ると、山には木があまりない。これはあくまで絵なのだから、実際にはもっと木があったはずだと思う人もいるかもしれない。しかし小椋さんの研究によると、この図は実態をかなり正確に反映した描写であるという。このような絵図を分析した結果、当時の京都近郊の山には、かなり低い植生の部分が多く、また場所によってはまったく植生のないところも広く見られたということがわかった（小椋『絵図から読み解く人と景観の歴史』）。

小椋さんは日本各地で同様の研究をし、その結果、江戸後期や明治期の日本の山の多くが、総じて低木だったり、草地やはげ山だったと結論づけている。小椋さんはもっと古い室町後期の京都近郊についても調べている。その結果、そのころでも、低木、あるいは植生自体がほとんどないようなエリアが少なくなかったという。

多くの人は漠然と、過去の方が森が豊かで、時代が進むにつれ、森が少なくなってきた、というイメージをもっている。だから減ってきた森を守らなければならない、木を植えなければならない、と考える人も少なくない。しかし、今日、日本列島の森の面積は、過去の歴史の中でもたいへん多い時期にあたる。そのかわり減ったものは何か。それは草地である。

現在、日本列島の中で草地が占める面積の割合は1%に満たない。しかし、小椋さんは、絵図・写真、さらには統計データも含めて研究した結果、20世紀初頭（明治後期）にはおそらく500万ヘクタール前後の原野（草地）が日本に存在したであろうとしている（小椋「日本の草地面積の変遷」）。また、それよりさかのぼって明治の初期にはさらに広い面積の草地があったと推定している。500万ヘクタールというのは、日本列島のおよそ13%に当たる面積である（地理学者の氷見山幸夫らも、明治期の地図を解析する作業から、「11%」という、ほぼ同様の推定をしている。氷見山他「明治後期―大正前期の土地利用の復原」）。

今日の草地面積が全体の1%以下に当たる34万ヘクタールなのに比べると、日本列島は思いのほか、草原の列島だったのである。さらに江戸時代について小椋さんは、肥料や牛馬の餌として草地が必要だったのだから、明治期よりもさらに多くの草地が存在していただろうと推測している。詳しい面積の推定はむずかしいとしながらも、地域によっては山の5割～7割以上が草地のところも少なくなかったのではないかと推定している。

草地の減少は、私たちにとってどういう意味があるのだろうか。

草原は、高温多湿な日本列島の中で、草原にしか生育しない種々の植物、あるいは草原性の昆虫などをはぐくみ、独自の貴重な生態系を形成していた。

しかし今日、草原は減少し、そうした貴重な生態系が少なくなった。草原性生物の危機である。草原の植物であるオキナグサ（絶滅危惧Ⅱ類）やフジバカマ（準絶滅危惧）、キキョウ（絶滅危惧Ⅱ類）、キスミレ（10の県で危惧種指定）、ヒゴタイ（絶滅危惧Ⅱ類）などは全国的に減少している。また、草原に依存していたチョウ、たとえばオオルリシジミ（絶滅危惧ⅠA類）やヒメシロチョウ（絶滅危惧ⅠB類）も危うい（高橋佳孝「草原利用の歴史・文化とその再構築」）。

高温多湿を特徴とする日本列島の自然において、草原は放っておくと森になる可能性が高い。にもかかわらずかつて1割程度の草原があったということは、そこに何かの力、つまり攪乱が加わっていたということだ、火山の噴火、あるいは洪水などがそうした力の一つだが、それに加え、人間の活動が大きかった。人間が刈り取ったり、焼いたり、あるいは、家畜を放牧することで草原は維持されてきた。

日本列島では、草地はさまざまな目的で利用されてきた。焼畑利用、放牧地としての利用、家畜の餌としての草の収集、燃料（薪）の収集、刈敷（田畑の肥料としての落ち葉）の収集、あるいはススキの屋根材利用といったいとなみが続き、それが草地を草地として維持してきた（ただし江戸時代には、肥料用の草地利用がゆきすぎて、はげ山となり、それによって土砂災害を引き起こしたことも指摘されている。水本邦彦『村 百姓たちの近世』）。

しかし、燃料が化石燃料に変わり、肥料も化学肥料など外部からの肥料に変わると、草地は生活に必要な場所ではなくなってきた。また、とくに第二次世界大戦後は、「拡大造林」の名のもとで、もともと草地だったところに大量の杉が植えられた。そうして、草地は消滅していった。

草地の歴史は、日本列島の自然における人間活動の意義を示してくれる。

- 問1 明治期以前の日本列島では、現代に比べて広範に草地が広がっていたと推測される。それを生態系（種の存在状況）の観点から 150 字以内で論証しなさい。
- 問2 明治以前の日本列島において草地が広範に維持されていたのは、人が能動的に関与したためだが、具体的にどのように関与したのか。その目的も含めて 150 字以内で解説しなさい。
- 問3 現在の日本において「森林の皆伐を進めて草地を増やそう」という運動が起きたと仮定した場合、あなたはその運動に賛成しますか、反対しますか。自分の立場を明らかにした上で、その理由を、論点を整理して 400 字以内で答えなさい。